

読者のページ

貸付・督促・滞納整理

市民局 内藤 恵子

納税や収納などの仕事のペテランには、笑われるかもしれないが、市のお金を貸付ける業務には早晚かわりのある、滞納整理及び督促という仕事を二年程体験した。この間、不覚にも仕事で涙を拭いたことが何回あったろうか。仕事が辛くて泣く程、もはや純情可憐な乙女ではない。腹わたが煮え返って、という程短気でもない。並はずれて、やさしく、思いやり溢れる人間というわけでもないが、どういうわけか被督促者、それに類する人の身の上話によく涙がこぼれた。

実の姉に盗まれた印鑑や保険証で莫大な借金の保証人に仕立

てあげられてしまい、やっと手にしたマイホームを抵当に、幼い子供をかかえ、何の責任もない夫を巻き込んだ苦しみを噛みしめながら、その夫と共に生涯借金の返済をしなくてはならなくなった女性。

娘婿に騙され、保証人となつて、土地や不動産を失い、唯一固守した小さなアパートの賃貸料で孫を養い余生を送る老いた女性。それでも、みなさんの大切な税金をお借りしたのだからと、月々千円ずつ行方不明の憎い男に代わって送金してやるのだ。

善良な人間がどうしてこんな苦しまなければならぬのだろうかと、共に世間を恨みたい気持ちになった。苦しい人を助けるための仕事で、さらにその人を苦しめることもあった。当該業務の福祉性の議論も聞かせ、直接督促に東奔西走することが是非かなど改善要素に頭を痛めながら、PRちらし作りから納付書送付すべて、うたい文句どおり手仕事、手作業で事務処理をしている。改善すべきことは、障壁が厚い。しかし、別の組織や金融機関などに任せてい

てはできなかったかもしれない。人の暮らしや生き様に触れることができたという点では、世間知らずの自分にとって大変な勉強になった。

大量生産では味わえぬ、手づくりのものへのぬくもり、心がやすらぐように、胸の痛くなるような仕事にも、相手との心が通いあった時のあたたかさを救いに、今日もまた、心の通う行政サービスをめざして、ダイヤルを回し、プライバシー保護の

へあとがき

横浜といえば、すぐ「みなと」と返ってくるほど、横浜と「みなと」は切っても切れない関係にある。「みなと」が横浜にとって大きな位置を占め、非常に重要な役割を果たしていることは明らかであるが、それがどのように、と聞かれると、ハタと返答に困ってしまう。

市内に働いている人の四人に一人が「みなと」と何らかの関係のある仕事をしており、「みなと」が横浜にとってなくてはならないものだとか感覚的には理解できても、その実態は、とな

手帳を胸ポケットに、マルサの女さながら、行方不明の債務者を追う。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

つのまにか、「みなと」が近づきにくい、見えないものになってしまった、と言えるだろう。こうしたなかで、ごく最近、「みなと」あるいは「みなと」をめぐる環境が大きく変わろうとしている。「みなと」の第一義的機能が物流・生産機能であることに変わりはないが、生活、文化等も含めた多様な機能が調和よく導入された総合的な港湾空間の形成が求められているのである。

特集2のところで、このような新しい動きのいくつかを鶴見から金沢まで横浜の水際線を探りながら追ってみた。M M 21地区といった中心部のみならず、京浜工業地帯や金沢の海べりも変わりつつある姿が見えてくるのである。

いずれにせよ、「みなと」が見えてくるためには、「みなと」に関する本を読んだり話を聞いたりすることより、まず「みなと」を実際に歩いてみることに第一歩であることを痛感した。なお、次号は九九・一〇〇合併記念号の予定です。

〈小林〉